

『映』(同年秋)などによって徐々に高まった。デア・シュトルム木版画展はドイツのシュトルム社主催、国民美術協会協賛によるもので、ここには新婦朝の山田耕筲と斎藤佳蔵(大正二年卒)が齎したドイツ表現派系を主体とする版画が展示された。これに強い刺激を受けた東京美術学校西洋画科生徒恩地孝四郎、藤森静雄、日本画科生徒田中恭吉が発行したのが『月映』である。この創作版画と詩の同人雑誌は発行部数がごくわずかで、しかも田中の病死により大正四年十一月に第七号で終ってしまったが、その主観的、独創的木版画は印象深いものであり、また、恩地、藤森という二人の版画家の出発点となったという意味でも特筆に値する。

次いで大正五年には長谷川潔、永瀬義郎、広島晃甫らが日本版画倶楽部第一回展を開き、また、前述のように山本鼎が帰国し、翌六年二月には国民美術協会展において西洋の影響を受けた日本の版画三百余点が展示され、併せて橋口五葉(三十八年卒)の木版画沿革に関する講演と合田清(東京美術学校仏語囑託教師)の西洋木版に関する講演、石井柏亭編『西洋の影響を受けたる日本版画』の発行、西洋名家のエッチングの展示があった。以上のような動きが日本創作版画協会として結実するのであり、その間に東京美術学校の卒業生や生徒は大きな役割を果たしたのであるが、学校自体は版画教育の開始には消極的で、漸く「臨時版画教室」が設けられたのは昭和十年になってからであった。

③ 寺崎広業の辞職、死去

日本画科主任教授にして東京の日本画壇を代表する寺崎広業は大



寺崎広業

正六年夏ころより健康を損ね、同七年十一月に辞職した。その推薦により文展審査委員には広業の後任として結城素明が選ばれ、また、松岡映丘が教授に昇格した(大正七年

十月二日付正木直彦宛寺崎広業書簡。本学芸術資料館蔵)。広業の本校辞職に際し、日本画科卒業生、在校生たちは方鼎式塗金銅印(香取秀真作)を贈り、職員一同は銀印二顆(大島如雲作)を贈ったが、それからもなく大正八年二月二十一日に広業は五十四歳の若さで喉頭癌のため死去した。

広業は日本、中国絵画を広く研究して新味ある日本画を描くことにつとめ、岡倉寛三、正木直彦の信任を得、本校教授として、また文展作家として目覚ましい活躍を続けた。「大仏開眼」(第一回文展)、「溪四題」(第三回文展)等が代表作とされる。正木直彦は『回顧七十年』に「寺崎広業」の一項を設けて「大仏開眼」制作当時の模様を詳しく書いているが、その為人についても次のように記している。

「私は寺崎君程八面鋒の畫家は無い、と思つてゐた。他の人とは仕入方〔込力〕が違ふので、間口が廣く奥行が深く、袋の中から取り出すやうに何でも遺れる。しかも自分は、常陸笠間の城主の後である、と云ふて居つた位で、氣位が高く、規模の大きいところがあ

る。と云つて、苦勞をして來たので、謹嚴ではあるが磊落であり、清濁兼せ呑むの概があつたのだ。」

「廣業は畫壇の大隈さんのやうな人であつた。一人ゐると、何によらず賑かで、非常に引立つたものである。酒を飲むと一層陽氣〔な〕により、唄ひ且つ踊るのであつた。弟子の中には、歌右衛門、羽左衛門のやうな役者や、常陸山のやうな相撲とりをはじめ、いろんな藝人などがあり、他に見られぬ華やかなものであつた。」

また、脇本楽之軒は広業の七回忌に因んで『万朝報』（大正十四年二月二十六日）で「寺崎広業を憶ふ」と題する一文を掲げ、そのなかで、

「廣業位、いはゆる死して悔なき生活をした人間は餘り世間に類がないだらう。光風霽月、正に竹を割つたやうな人物であつた。親分ともいはれた。大正の文晁ともいはれた。確かに其評の如く豪快な男で、正面の床には東山名物傳吳道子筆の觀音圖を懸けた數十疊敷の大廣間である所の畫室兼客間は毎日市をなす程の客であつた。」

「廣業の畫は、晩年よほど老蒼の氣を含んでゐた。今頃まで生きてゐたら、これは觀山君や大觀君などの作品を見るにつけても必ず思ひ出すことである。あの氣魄充滿せる一種の骨氣、恐らくあれは廣業と共に東洋畫壇から永久に滅びたのではないかと悲しまれることがある。」

と言っている。磊落でさっぱりした親分肌の氣性、華やかな生活振りは生前もよく話題になつたが、臨終の際も、いかにも広業らしく、幾日も前から各新聞が病状を報じ、多数の門弟や知人に取り囲まれて他界する涅槃のようなさまが大きく報じられた。

二月二十四日の葬儀も実に盛大であつた。翌日の『東京朝日新聞』によれば、小石川関口町の邸を出た葬列は三百の門弟が柩を護り、数丁に互る大行列であつた。先払いに続くは各界名士からの生造花、花環数十対、総泉寺住職導師らの乗つた二台の馬車、門下生三浦広洋（三十八年日本画科卒）の捧持する「寺崎広業先生之柩」の銘旗（正木直彦筆）。その後には中川華堤、鳥谷幡山、稲田吾山ら門下生が勲章、香炉、位牌を捧げて従い、次いで白木の柩が野田九浦、須田霞亭、葛谷龍岬（四十三年日本画科卒）、菊沢武江（四十五年同）、伊藤龍涯（三十六年同）、矢沢弦月（四十四年同）、塩崎逸陵（四十年同）、町田曲江以下十六名の門下生に護られて進み、これに喪主広載ひろたくし、副喪主広節ひろたけ、二百余名の門下生が続ぎ、一方、浅草橋場の総泉寺では本校生徒、竹内栖鳳、横山大観、小堀鞆音、小室翠雲、今泉雄作、福原鏡二郎、黒板勝美、正木直彦その他千余名が葬列を出迎えた。そして型どおりの葬式に続いて本校校長正木直彦、帝室技芸員総代高村光雲、本校卒業生総代結城素明、門下生総代鳥谷幡山、友人総代岡田朝太郎博士らの弔辞朗誦があつた。遺骸は総泉寺に埋葬された。

広業歿後、関口御殿と呼ばれた旧居は家宝とともに売却され、信州上林の別荘は広業と親交のあつた永平寺管長日置黙仙禪師に譲られ、広業山上林寺となつた。家塾の天籟画塾はわが国最大の画塾と

まで言われたが、大正八年八月に解散した。翌九年二月二十一日には鶯谷の伊香保で広業忌が営まれ、次いで五月一日から一週間、天籟会主催の広業遺墨展覧会（竹の台陳列館）があり、その十一月には天籟会編の『広業偉観』が発行された。なお、外に作品集としては広業の生前に審美書院から発行された『広業画譜』一、二（明治四十三年、大正六年）がある。ところで、本校の教官、旧教官が死去した際には校友会月報に追悼記事が載るのが常であり、広業のような大家はなおさらである。しかし、それが無いところを見ると、編者が失念してしまつたらしい。

④ 工芸部改革の検討

大正五年の東京美術学校改革運動以来、根本的改革の必要性が指摘されていた工芸部（図案科第一部、金工科、鑄造科、漆工科）では、種々協議を重ねた結果、同八年三月にまず教育課程の改正案である「工芸美術部仮規定」をまとめた。その要旨は学科課程を普通科二年、本科三年とし、普通科で美術に関する基礎教育（日本画・鉛筆画・水彩画・木彫・塑造等の実技と美術史・工芸史・風俗史・用器画・文学等の学科および修身、体操を十分受けたあとに本科へ進み、専門の技術を学ぶこととし、また、生徒は美術部の学科の聴講もできるようにするといふものであった。本校創設当初の規則では普通科二年、専修科三年とされ、基礎教育重視の方針がとられていたが、工芸部では今回この方針を復活することに決したのであった。

工芸部におけるこうした改革の試みは世の関心をひき、新聞にも次のように報道された。

○革新の手入が始まる

時節到来の美術學校

大缺陷と云はれて居た工藝部の教育方針一新

彫刻圖案鑄造三科の動搖

多年懸案の東京美術學校革新問題も今回正木校長英斷の下に愈々解決される時機が来たやうである、革新と云つても日本畫科、西洋畫科（、図画）師範科等には殆んど關係がなく矢張り同校の最大缺陷と云はれて居る彫刻科圖案科鑄造科の上に係る問題である

先づ改革の手は第一に工藝部全體の教育制度の變改から着け始められた、從來工藝部は五箇年修業中豫備教育が三箇月、實技教育が四年七箇月であつたが最も美術家らしい實技家を養成すると云ふ新方針の下に此四月から豫備的美術教育を二箇年に實技教育を三箇年に變改實施する教育の根本的刷新で非常な進歩と云つてよい、次に來るべきは鑄造科圖案科及び美術部中彫刻科の人の問題である 聞く所に依れば鑄造科主任櫻岡（三四郎）教授は病氣隱退、助教津田信夫氏は教授に昇進と決定近々發表の筈、又櫻岡氏の後任は英才香取秀眞氏を抜く爲め目下同氏に交渉中である、圖案科では四圍の事情上島田（佳允）主任教授の隱退となるべく後任として學校出身の英才小幡恒吉、十二町貞吉、澤田誠一郎三氏が數へられ其中小幡氏の呼び聲が一番高い、建築圖案科及び金工科も多少の動搖はあるが建築科に古宇田實主任があり金工科に海野美盛主任が居るから、大した改革の餘地はあるまい、最後に難物中の難物は彫刻科であるが、今度彫塑部主任の白井雨山氏が急